



## くらしかた・すまいかた Vol.21

### 里山長屋

緩やかにつながり、支えあう、温故知新の住まい

神奈川県旧藤野町（現、相模原市）。新宿から1時間程度の藤野駅から少し離れた里山に4家族が暮らす「里山長屋」があります。

閉ざされていく現代の住まいに対比するように周囲へと開かれたこの長屋では、周辺環境だけでなく、隣人ともほどよい距離感でつながる多様な関係性を感じることができます。パーマカルチャーのデザイン思想をふんだんに取り入れたコーポラティブハウス「里山長屋」のくらしかた・すまいかたを伺いました。

取材・撮影・編集：(株)地球工作所 Earth Planning & Workinc  
取材協力：山田貴宏さん（ビオフォルム環境デザイン室）、I家の皆さん、Fさん

#### 里山長屋に住む

編集部：この里山長屋ができるまでの経緯を教えてください。

山田さん：里山長屋のプロジェクトはパーマカルチャー塾を通しての知人である2人が、2家族で集まって暮らすための住まいを作ろうと藤野のこの土地を見つけてきたことから始まったものです。

当初、僕は設計者としてこのプロジェクトに関わっていたのですが、作業を進めるにつれて一住民として長屋のメンバーに加わるようになりました。その経緯は「里山長屋をたのしむ～エコロジカルにシェアする暮らし（学芸出版社）」にまとめたので、興味のある方にはぜひ読んでいただきたいです。

その後、里山長屋は2011年に竣工し、現在お住まいになっているのは発起人のうち1人だけで、もう1家族の方はIさんの家のオーナーさんです。

今日、取材にご協力いただいているIさん、Fさんとも賃貸の住人さんなんです。

編集部：こんなに素敵な住宅に賃貸で住めるっていいですね。

Iさん：そうですね。私たちもよく「ここにはどうやって住めるんですか？」と聞かれます。

編集部：コーポラティブ住宅なので、土地から買わないと住めないものなのかと思っていました。お二人ともどういうご縁だったのでしょうか。

Iさん：オーナーが友達なんです。Fさんもお知り合いなんですよ。

Fさん：そうです。たまたま家を空けることになったので借りることができました。

編集部：お二人とも以前から藤野にお住まいだったのでしょうか？

Iさん：私は藤野にあるパーマカルチャー塾で夫と独身時代に出会っていて、藤野はずっと縁のある場所ではあったんですが、住まいはまったく別の場所だったので、ま

さか藤野が自分達の暮らしの場になるとは思っていませんでした。ただこうやって山田さんをはじめ、パーマカルチャーのことを一緒に学んだ仲間だちが藤野で暮らすようになって、この長屋に遊びに来るうちにだんだん気持ちが藤野で暮らす方向に動いてきたんですね。

そんな時、パーマカルチャーと一緒に学んだ仲間、里山長屋の住民であったうちのオーナーから、「私たちは移住するので、その間この家に住まないか？」と言われて、娘の入学を機に、里山長屋に住むことになりました。

山田さん：Iさんたちの家のオーナーさんは、ニュージーランドで暮らして、5～6年で帰国の予定だそうです。

Iさん：その家にも私の子どもと同じ年ともっと小さいお子さんがいて、ここに住んでいた時はよく遊んでもらっていたんです。海外に引っ越してしまったので、娘は寂しく感じているようです。



Iさん（旦那さん）：うちのオーナーはこちらに住んでいる時もシュタイナー学園に子どもを通わせていたんですが、移住先のニュージラードでもそうしているようです。

編集部：日本のシュタイナー学園は他にもあるんでしょうか。

Iさん：学校法人として認可されているのは藤野だけですね。北海道や千葉、京都にもありますが、他はフリースクールのような扱いだったと思います。

うちとFさんのお嬢さんは同じ年で、2人とも藤野のシュタイナー学園の小学部に入学することになり、それに合わせて家族で里山長屋に入居しました。

編集部：ちなみに親御さんのお勤めはどちらなんですか。

Iさん（旦那さん）：私は柏の葉キャンパスが勤め先です。そのため平日は単身赴任で週末は藤野に帰ってくる生活をしています。

Iさん：柏の葉は遠いんですけど、丸の内辺りであれば同級生のお父さんたちはけっこう通われているみたいです。

## 人と人が豊かにつながる、里山長屋の魅力

編集部：以前はどちらにお住まいだったんですか。

Fさん：以前は目黒に住んでいました。その頃から自然豊かにに興味があって、いつかこういうところに住みたいと思っていました。藤野に引越してきた一番のきっかけは子どもの学校なんですけど、うちは母子2人なので、長屋というものにもすごく惹かれました。それ以外にも建物が素敵とか、畑があるとか環境面でも色々あっ

たんですけど、一番の魅力は「一緒に住んでいる」という感じですね。

Iさん：私たちは京王線の平山城址公園駅から雑木林の丘を上がっていく割と自然が豊かな場所でしたね。

編集部：ロケーション的にはこと似た感じなんですか。

Iさん：ここほど里という感じではなく、森と町のちょうど中間くらいの位置に家があり、どちらにもすぐにアクセスできるところに暮らしていました。その頃はまだここまで深く「森の中に住む」という覚悟はまだできていませんでした。

編集部：住んでしまえば何とかできますか。

Iさん：なります。この魅力は環境もそうだけど、人なんですよ。人と人がすごく豊かにつながっているのが魅力で、長屋という場所もまさにそういった象徴の場だと思います。

里山長屋では毎年、お正月の恒例行事として餅つきをやっていて、私たちはそこに呼ばれてきたのが最初でした。

その時「この空間がすごく落ち着いて豊かだな」と感じることはもちろんですが、そこに集まってくる人たちがみんなすごく素敵なお顔をされていて、とても温かいというか、大人が楽しそうに集まっているのがとても魅力的だと思っていました。

山田さん：長屋の隣に住んでいる人たちも友達なんだよね。

編集部：そちらの皆さんはいつからお住まいなんですか。

山田さん：一昨年くらいですかね。長屋の方が入居は先なんです。実はその人たちも長屋への参加を検討していたんですが、自分たちは戸建ての方が合っているということで戸建てに住むことにな

りました。でもこういうコミュニティのよさは理解されているので、長屋の隣に土地を購入して、戸建てを建てて住むことになったんです。このお宅も僕が設計をやらせていただいています。

Iさん：そのうち山田ビレッジになっちゃうんじゃないですか。

編集部：さらに拡大する予定があるんですか？

山田さん：里山長屋の目の前の敷地にも建つ予定なんです。

Iさん：うちもこの近くに土地を買って、山田ビレッジの仲間入りをしたいな。

編集部：この近くにお住まいの方は学園にお子さんを通わせている方が多いんでしょうか。

Iさん：そうですね。子どもの入学に合わせて藤野へ引越されてくる方も多いです。長屋の近くの家の子も同じ学校に通っています。学年は娘よりも少し上ですが、木や石垣の登り方や高いところからの降り方とか、色んなことを教えてくれるので娘はその子のことが大好きなんです。この間も2人で長屋の通路横の木の実を食べました。

## 家の目の前に畑がある幸せ

編集部：長屋の畑はどういうルールで使われているのでしょうか。

山田さん：各戸の前の畑はそこにお住まいの方のものです。通路脇に植えてあるラズベリーやブラックベリーは皆のものです。

Fさん：朝ごはん用に、よく自分の家の畑に作物を摘みに出ているんですよ。キュウリとかシソとか。

Iさん：すごい豊かだよな。

Fさん：そう、摘んだばかりのシソの葉一枚でもすごい幸せ。

Iさん：そういう時に目が合うと、キュウリを半分分けてもらえたりするんですよ。朝、パジャマ姿のまま娘さんがキュウリを持ってきてくれたりします。それで朝ごはんが充実したりします。

編集部：いいですね。土があって、自分で何かを育てて、毎日の食卓を充実させることができるって。

Iさん：各戸の畑を区切る垣根の高さが低いので、お隣さんと交流しやすいんですよ。

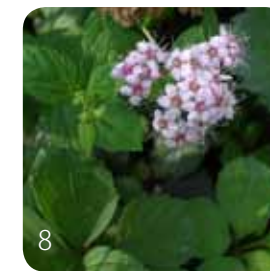
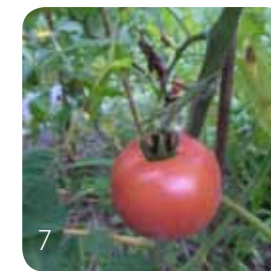
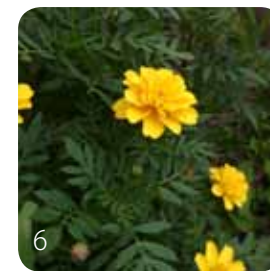
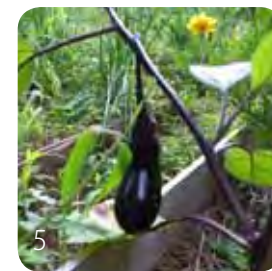
山田さん：そうですね。一軒一軒は長屋だから独立していますが、1つの建物の中に4世帯が存在しているからか、4軒が独立して並んでいる形とはちょっと住む人の意識が違っているんでしょうね。

編集部：家の前にある畑や道がつながっているのが大きいんでしょうか。普通だったら一軒一軒の庭も仕切られて、隣との行き来はできませんし。

山田さん：普通だと北側に共用廊下と各戸の玄関があって、南側の前庭部分もフェンスで区切って行き来できないようになっていきますからね。町中だと出入りを隠そうとしたつくりになりますが、この長屋の場合、南側に共用廊下と玄関があります。人によっては家の前をウロウロされるのが気になる時もあると思いますよ。長屋の住民だけじゃなくて、隣の家の子どももよく通りますしね。

Iさん：お隣の子なんですけど、その子は半分くらい「長屋の子」って感じです。

編集部：家の前庭が共用通路でも、長屋なら安心して窓を開けて



1. 里山長屋の前畑。小路沿いの実りは皆で。各戸の畑には思い思いの作物が植えられている。2. 山田邸の雨水タンク。3. 山田邸の畑はコンパニオンプランツが植えられている。4. 小路沿いのラズベリーは皆のもの。食べ頃になると子どもたちが真っ先に味見をする。5～8. 畑の作物たち。ナスやトマトの他に、害虫除けを避けてマリーゴールドやハーブ類も植えられている。





9



10



11



12



13

いられますか。  
Iさん：どうでしょう。Fさんはよく開けているよね。

Fさん：うちはよく開けっ放しにしていますね。私はちょっと変わっていて、都内に住んでいた時も鍵をかけないでいましたね。我が家に絶対泥棒は入らないと思って。

編集部：場所の問題ではないんですね。  
Fさん：締めないということではなく、出かけて帰ってきた時に締めていなかった事に気がつくというか(笑)。

編集部：それで大丈夫だったんですか。  
Fさん：たぶん。泥棒は入っていません。

Iさん：彼女のこういう大らかなところに私は憧れるんですけど。都内の家でも開けていた、というのは今はじめて聞きました。  
山田さん：我が家も基本的には窓を開けていますよ。

Iさん：お留守の時も窓が開いていますけど、風を通すためなんですか？

山田さん：1階の窓だったら、単なる閉め忘れです(笑)。僕が先に出て、妻が後に出る時が多いんですが、玄関の鍵はかかっているのに、なぜか隣の窓が開いたりするんですよ。

## 里山長屋に住みはじめてからの変化

編集部：自然が多い分、虫等も多いと思うのですが環境には慣れましたか？

Fさん：私は虫を見たら悲鳴をあげちゃう人でしたが、さすがに毎日見ているので慣れました。今でも触れはしませんが、そんなに騒がなくなりました。都心の家の中で

虫が出たら「ギャー！」でしたけど、ここはあまり境がないというか。

Iさん：この間すごく大きいムカデが家の中に出て、最初は怖くて逃げちゃったんです。そしたら山田さんの奥さまに「見逃しちゃダメ」と言われて。やっぱり子どももいるし、噛まれても困るし、皆を守るために退治しなくちゃいけないと思なおし、ホウキでバシバシ叩いて森に葬りました。

編集部：そうやって人は強くなっていくんですね。

Iさん：ちょっと涙目でしたけど(笑)。でもこの環境を受け入れないところではやっていけない、というのはありますよね。でも見つける度に殺していたら、1日何匹もの虫の命を奪うことになるので、危害を加える虫以外は、こうパッとつかんで外に放すようにはなりましたね。

山田さん：まあ虫だらけですよ。今日はあまりいませんが、夏は蚊も多いです。木建てなんで隙間も多いですね。

編集部：サッシは全て木製なんですか。  
山田さん：全て木製にするとコストもかかるので、基本的に南側の窓だけ木製にし、壁の部分に全部引き込めるようになっていきます(写真9)。アルミサッシだとそうはいかないので、そこは使い分けました。

編集部：壁の厚みがすごいですね。  
山田さん：土壁は60mmあって、その外側に10cmの断熱材が入っています(写真10)。だから壁が厚いんですよ。

それで夏は躯体に蓄冷をして、冬は蓄熱をしています。冬の昼は暖房がいらぬんです。住みはじめてからはどうでした？  
Iさん：引越は4月だったんですが、その時は中間期だったので特に寒い暑い

は感

じませんでした。ただ藤野はすごく底冷えをする土地らしく、オーナーさんからはこの家はその底冷え体験をしないですむよと言われているので冬が楽しみです。太鼓判を押して出かけていきました。

山田さん：計測値を見ても、実際、外気温がマイナス5度でも、中は土壁なので暮らしていると土が温まってあまり冷え冷えという感じはしません。

編集部：冬の暖は薪ストーブですか？  
山田さん：お隣はそうですが、我が家はペレットストーブ(写真11)です。

Iさん：うちはアラジン(石油ストーブ)1台で乗り切るつもりです。Fさんの家もたまたま同じストーブなんですよ。

Fさん：うちはこちらに引っ越してくるにあたり新たに買いました。

Iさん：うちは10年くらい前に買ってしばらく使わなくなっていたものがあって持ってきました。

編集部：都内のマンション等では開放系のストーブは使えませんか。

Iさん：そうですね。それもあって前の家ではちょっと心配でずっとしまっていたんです。こちらでは違和感なく使えています。逆にここに住んでいると電気を使うことにすごく罪悪感を感じます。お隣さんにも「えっ、電気ストーブ？」とか言われてしまうので、オイルヒーターや電気ストーブなどは使えないかな。

山田さん：生電気はダメです。お隣さんは10アンペアで生活していますよ。太陽光発電パネルも載せてあるので(写真12)、それで賄っているようです。

編集部：里山長屋では全戸に太陽光発電パネルを載せているのでしょうか。

山田さん：全戸に採用したのは発電ではなく、「そよかぜ」という太陽熱集熱システムです(写真13)。屋根で受けた太陽熱を室内に取り込み、冬はそれで床下から暖房するという仕組みです。ただ夜になると太陽熱での暖房も限界があるので、薪ストーブ等の補助的な暖房を使って寝前の数時間を賄っています。あとは朝出かける前の1時間くらいだけ使っています。

Iさん：ペレットストーブは点火してすぐに温まるんですか？

山田さん：そうですね。

Iさん：薪ストーブは温まるまでがすごく辛いという話を聞いたことがあります。朝起きて火をくべてから一度ベッドに戻り、温まったところに改めて起きてくることになるそうです。

編集部：ひと手間かかるんですね。

山田さん：薪ストーブは薪をくべてから30分くらいかかるので、ずっと焚きっぱなしにした方がいい暖房器具です。夜も置き状態しておけば、朝起きてから薪をくべるとすぐ火が起きます。Iさん、Fさんがお住まいの家も薪ストーブが設置できるように煙突の穴は開けてあるんですよ。

Iさん：そう言えばレンガが敷いてあるところがありますね。うちはピアノを置いています。

Fさん：うちはどこにあるんですか？

山田さん：玄関の土間のところにあるスペースです。おいおい揃えていくということで煙突の穴は開けてあります。薪ストーブは煙突込みで100万円位しますからね。

Fさん：それと梅雨の時期に思ったんですが、この長屋って外にいるより家の中に入った方がすごしやすいですよ、洗濯物を部

屋干しても乾くし。  
山田さん：それは壁に使っている土の効果だと思います。

編集部：壁が調湿しているという感じでしょうか。

山田さん：多少ですが、そうです。

編集部：その他に体感したことってありますか？

Fさん：子どもを学校へ迎えに外に出るとすごい湿気な日でも、家の中ではそこまで感じないので、ああやっぱり壁とか木とかの効果なんだなと感じましたね。

山田さん：実測値を見ると、実際に家の外よりも中の方が湿度が低いですからね。あとはやっぱり夜のうちに建物を冷やしておくと翌日の午前中くらいは本当にひんやりしているから、それはぜひやった方がいいと思う。

Iさん：あと今はもう慣れてしまったんですけど、越してきたその日にすごく眠りが深かったんです。建物が違うと眠りの質が違うというのを実感しました。

あとうちは猫を飼わせてもらっていて、猫も初めての家はすごく緊張するんですが、引越し屋さんが帰られて人がなくなったら、すぐに床に腹ばいになって毛づくろいしていました。猫は快適性を測る一番のセンサーなので、それはすごいと思いました。

Iさん(旦那さん)：前の家に引っ越した時は、一晩中、家の中を嗅ぎまわって自分の縄張りを確認しないと寝なかったんですけど、長屋ではすぐに出てきましたね。  
山田さん：人見知りの猫ですよ。

Iさん：前はそうでしたけど、今はだいぶ慣れてきて、顔を見せるようになりました。

人が通る度に逃げていた身が持たないということに悟り、長屋仕様になってきたようです。

山田さん：子どもはどうでしたか。ここに引っ越してきてから何か変わりましたか。

Iさん：すごい変わりましたよ。まずうちもFさん家も家の中でブランコをつけているんです。

Fさん：梁があるので、それを利用しています。

Iさん：前の家でもハンモックは吊っていたんですが、今はブランコに夢中です。言葉にするのは難しいのですが、私はこの家に遊ばせてもらっていると感じています。

Iさん(旦那さん)：身体能力自体もかなり上がっていますね。

Iさん：そうそう。学校の先生にも褒められたんですよ。長屋の通路として枕木が置いてあるんですが、「ああいうデコボコした道を歩くのは子どもの発育にとってとても良いですね」と。うちの子はすごく転びやすい子で、引っ越してきて2~3回立て続けに転んでいたのが、今ではまったく転ばなくなりました。コンクリートの真平らな道じゃなくて、デコボコした道の方が確かに良いようです。こちらに引っ越してきてからうんていとか登り棒とか、体を使った遊びが楽しくなったようでよく遊んでいます。

Iさん(旦那さん)：体と頭が一緒になってきているというか、体が言うことを聞いてくれるようになってきていると感じています。

Iさん：親が「そういう経験をさせなくちゃ」と思わなくても、自分で進んでどんどん遊びに行っていますね。子どもは環境で変わるんだなと実感しています。



## 心地よい距離感でつながる暮らし

編集部：子どもたちは前の家に戻りたいとは言いませんか。

Iさん：「まちはまちでいいなあ」とは言いますが、でも「戻りたい」とは言いませんね。

Fさん：うちは「戻りたい」とは言ったりしますよ。やっぱり遊び友達がいるから。でもここは安心して子どもを遊ばせておける環境ですよね。車があまり通らないということもあるんですが、物がなくても楽しんでます。

Iさん：もう一つ私を感じたのは家だけじゃなく、ここにいる大人に遊んでもらっていますね。

山田さん：よく来るよね、2人とも。

Iさん：越してきたその日から、親たちが引越しの片づけで忙しかった時に2人で山田さんの家に遊びに行ったりしていましたね。

山田さん：週末はけっこう我が家に来ますよね（笑）。

Iさん：知らないうちにおやつとかご馳走になっていて、いつもすみません。この前も山田さん家で掃除機をかけたらしくて、いつの間にかそんなことを。

Iさん（旦那さん）：家だと絶対にやらないのに（笑）。

Iさん：そう。私の言うことより、山田さんの奥さまの言うことの方をよく聞いていますね。長屋の他の家の人が通ると嬉しくて。

山田さん：ねえ、よく声をかけてもらってます。

Iさん：行ってらっしゃいとか、いつ帰ってくるの？とかですね。

山田さん：長期出張が多い住民がいつ帰ってくるかについても、本人じゃなく、子ども経由で知ったりしますからね。

Iさん：長屋伝言板として機能しているんです。情報も早いですし。山田さん：それは面白いところですよ。

Iさん：色々な大人の目があるのはありがたいし、この間も山田さ

んがうちの娘の言葉遣いをさりげなく注意してくださって、そういうのもすごいありがたかったし、いつも目をかけていてもらえるのはありがたいなあ。

山田さん：こう聞くとなんかいいことばかりですね。

Iさん：皆さん紳士的というか、すごく礼儀はありますし、何でも荒い口調でズケズケと言いつつ合うような感じでもないです。

山田さん：穏やかな人ばかりですよ。長期でいらっしゃらない方は植物の専門家で、いろいろ教えてくれるんです。

Iさん：我が家は春先に引っ越してきたので、春の摘み草を教えてくださいました。ノビルをはじめ、食べられる野草と一緒に摘みにいって調理したり、楽しかったですよ。

山田さん：住民同士でもそういう役割分担ってありますよね。僕はこの長屋の管轄というか、管理人というか。「不具合があったら何でも言ってください」というか（笑）。

Iさん：網戸に穴が開いたら修理をお願いしたり。

Iさん（旦那さん）：私は手直し部隊で。あとは週末に草刈とかしたりしています。

それから引っ越してくる前から感じていたんですが、みんなが一所に集まれるコモンハウスがすごく機能しているように感じます。これは実際に住んでみて、より強く思うようになりました。

山田さん：月1-2回の頻度ですが、皆で集まってご飯を食べたりするだけで心にゆとりが生まれますよね。コモンハウスは各家より少し大きいんですよ。せっかくなんで皆さん、積極的に使っていただいた方がいいと思いますね。

Fさん：子どもたちはけっこう使っていますね。

Iさん：天気が過酷な日はずっと家にいられると私達も辛いんですよ。外のお友達を呼んでワイワイというのは管理上問題があると思うんですけど、2人だったら「2階にあがらない」とか「キッ

チンでイタズラしない」という約束をして、コモンハウスで静かにおしゃべりしたり、折り紙したり、お絵かきしています。

編集部：家のすぐ横にあって、子どもたちが集まって何かできる場所というのは、なかなかありませんものね。

Iさん（旦那さん）：目が届きますしね。

編集部：月2回程度のご飯会というのは、持ち寄りなんですか、コモンハウスのキッチンで調理するんでしょうか。

Iさん：ケースバイケースですね。お正月の餅つきの時等は、コモンハウスのキッチンで皆でわーっと作ったりしますが、家で作って持っていく方が便利な時もありますし。

Fさん：私は子どもが生まれてから料理教室にずっと通っていたので、月に一度くらいの頻度で教えるようなことをゆくゆくはしたいなと考えています。

山田さん：月1回でも長屋のコモンスペースにあるキッチンで料理教室を開いてくれたら、皆重宝するんじゃないかな。

今はちょっと停滞しているけど、以前はヨガ教室や俳句の会など色々な教室を開いていたんですよ。住民のお友達に先生がいたので、その人を呼んできてやったり、あとは月1回でフリーマーケットをやったり。

Iさん：学園の送り迎えで親が来るんですが、そのついでに寄って行ってという意味で「ついでに寄ってって市」という名前がついていました。私たちが借りている家のオーナーが月一でやっていて、けっこう続いていましたね。それもそのお母さんたちの眠っているスキルを活かしましょうという感じで、野菜を育てている人なら育てた野菜を持ち寄るとか、月一でやっていたのでけっこう楽しかったです。

## その土地に合ったデザインをする

編集部：長屋の皆さんをつなげるきっかけになったパーマカルチャー塾はいつ頃から藤野にできたのでしょうか。

山田さん：1996年の発足ですから、もう18年経ちました。役場にいた方達が若い人を呼ぶような色々な政策をとって、最初はアーティストや音楽家等の芸術家がたくさん入ってきたんですよ。その後パーマカルチャーセンターが発足したので、私たちが入ってくる前から少しずつですが藤野には人が集まっていたんです。

そこへパーマカルチャーセンターができて、若い人がどっと藤野に来るようになり、その後シュタイナー学園が学校を移転させてきたんですね。今から10年くらい前のことです。

編集部：シュタイナーの存在は大きそうですね。

山田さん：シュタイナーに子どもを通わせている親御さんって、自然環境やパーマカルチャー的なものに関心を持っている人が多いですよ。

編集部：パーマカルチャーとはどういうものなんですか。

Iさん：農的暮らしを主体としていますが、それだけに限らず暮らし全般を対象としています。

編集部：この里山長屋もパーマカルチャーの理念を元に設計されたと考えてよろしいでしょうか。

山田さん：そうですね。でも環境とどう折り合いをつけていくのかというのがテーマなので、パーマカルチャー建築というのは特にありません。最初の4世帯の皆さんはパーマカルチャーに精通されていたので、「パーマカルチャー的な住環境にしようね」というのはもちろんあったんですけどね。でもそれは特別なことではなく、例えば自然素材を使ったり、壁を土壁にしたり、この里山長屋の取り組みはまあまあ成功したと思っています。

Iさん：塾ではいろんなものと調和しながら、その土地その土地に合ったデザインをしていくことを学びました。まさに塾で学んだことが里山長屋で実現されていると思います。

編集部：塾での学びはお仕事などでも活かされましたか。

Iさん：私はもう何年か前に辞めましたが、当時は公立小学校の教諭でした。パーマカルチャー塾で学んだことは全て子どもたちに還元していましたね。

例えば、学校のまわりにある素材だけでアースオープンを作って、沢水を汲んできて、パンを焼いたり。校庭になっている柚子でジャムを作って、柚子ピザにしたり。学校のお祭りでそのピザを振舞ったり。それは塾生の時に刺激を受けてやったことのひとつです。

一番深い学びは、作ったものを最後に全て壊して自然にお返しできるということを子どもたちに体験させたことです。作るだけでなく壊して自然に還すという一連のデザイン行為を子どもたちに体験させたかったので、子どもたちが進級するタイミングで自分たちで更地に戻してもらいました。中庭に作ったアースオープンにお別れする時、最初は子どもたちも少しづつやっていたんです



14. 長屋の小路をかける子どもたち。  
15. コモンハウスにはキッチンの他、和室や浴室、洗濯場も備えている。16. 年末の餅つきの様子。17. 5月の藤野の陶器市が開催された折に長屋を開放した時の様子。18. 里山長屋の中心部にある通路。共有の収納スペースも兼ねている。19. 雪かき用のスコップを下げるフックはIさん（旦那さん）の作。4世帯の住民の中でそれぞれの役割がある。







里山長屋2階からの眺め。栗畑は敷地外になるが、夏の日射遮蔽にも役立つそう。

けど、その印象が強かったらしく、もう中学生になった女の子のお母さんから「今でも子どもとあの時の話をしています」と言われたりします。

## 豊かな人的資源を発掘する、地域通貨「よろづ屋」

Iさん（旦那さん）：面白いのが、こっちに引越す前に金継ぎを教えてくれる人とか、調子の悪かったストーブを直してくれる人とか、「きっと藤野に行ったら見つかるよね」と夫婦で話していたら、本当に両方見つかったことです。

Iさん：声に出すとみんな叶っちゃうみたいです。

編集部：じゃああえて言っておいた方がいいですね。

Iさん（旦那さん）：いやでも実際そうなんです。声に出すと願いが叶う感じです。

Iさん：習い事は学園では制限されていますが、もし先生を探すにしても藤野には技を持った人が多いので、聞くとどここの誰々さん家に習いに行っているという答えが返ってきますね。ピアノにしてもバイオリンにしても、藤野の中で事足りてしまうんです。

編集部：人的資源が豊かなんですね。

山田さん：それをつなげているのが藤野地域通貨「よろづ屋」のメーリングリストだと思います。よろづのメーリングリストに投げ掛けをすると答えが返ってくる仕組みです。

Iさん：「あれ欲しい」とか「これを教えてください」とか。うちのストーブも壊れて捨てようと思っていたところ、よろづで直してくれる人が見つかりました。そういうものを立ち上げて発展して機能しているのがすごいなあと思うんですね。

山田さん：ありとあらゆる要望が行き交っていますよ。隣の足が悪いおばあちゃんが駅まで車で送ってくれる人を探しているとか、

そういう要望にも答えてくれる人がいますからね。長屋だけでなく、地域にそういう人たちがいるという安心感がありますね。

Iさん（旦那さん）：この地域通貨は通帳形式で、やってもらった人がやってくれた人にポイントを贈る仕組みです。

山田さん：肩もみ1回500よろづとか、ポイントは当事者同士の話し合いで決められるんです。

Iさん（旦那さん）：地域通貨は通帳形式の他に実際の紙幣のようなものを発行する仕組みがありますが、ここは通帳形式なので仮想紙幣をやり取りすることはありません。通帳にマイナスが溜まると使えないように思いますが、そうではなく「もっと人をお願いをなさい」ということらしいです。

山田さん：そうね。ポイントを溜め込むために地域通貨を使っている人は全然いませんね。

Iさん：人とのつながりを生むためのものなんですよ。

山田さん：うちのテーブルもよろづで作ってもらいました。もちろん全部よろづで賄ってはいませんが、価格の2割はよろづで良いよ、と言ってもらったのでそれで支払いました。

Iさん：うちの下駄箱もそうなんです。すごく素敵ですよ。皆似た方向を向いているからか、情報はすぐに回るんですよね。不思議なことに自分で取りにいかなくても、必要な情報が必要としているタイミングで向こうから入ってくるんです。

山田さん：よろづに参加している人たちの中心は藤野ですが、上野原と相模湖、数は少ないのですが都心でも藤野に遊びにきて、これ面白いといって入っていく人もいます。

編集部：投げ掛けに答えてくれる人がいなければ成り立たない仕組みだと思うので、多様な要望を支えるコミュニティがあるというのが前提なんでしょうけど、本当にすごいですね。

今日は貴重なお話をありがとうございました。（終）